

探訪 北の風景 ④5

幻想的な空間に響き渡る住民の熱意

札幌市石山緑地公園

萩本和之

ギリシャ・ローマ遺跡のような造形物。背後には屹立している奇形岩の岩肌——。その異空間の周りを緑が包み込み野趣あふれる。ここは札幌市南区の石山緑地公園の一角。

石山地区は札幌の南西部に位置し、1874(明治7)年に札幌軟石(支笏溶結凝灰岩)の採掘が始まり、切り出された札幌軟石は、昭和初期まで道内の著名な建造物などの建材として活用されてきた。

その石切り場跡をメモリアル化しよう、と札幌

市は1987(昭和62)年から調査、計画して、9年間かけて約12ヘクタール公園化した。公園は道を挟んで、大きく南北2つのブロックに分かれて、北は見晴らしの良い展望テラスやテニスコート、ゲートボール場などが完備されている。

南ブロックは彫刻家、国松明日香ら5人の造形集団「サンク」が軟石のがけの谷間をアース・アート化。野外ステージの「ネガティブ・マウンド」や、石のオブジェが散りばめられた「午後の丘」、南ブロックの入り口の「呼吸する門」などが配されて、幻想的な芸術性が高い空間を織りなしている。第8回札幌市都市景観賞を受賞しているほか、第1回さつばろ景観総選挙では第1位に選ばれている。特に、野外ステージは「インスタ映え」と音響の良さは定評で、音楽祭典や太鼓のイベントなどに利用されている。

「石切りの里」の同地区は札幌では珍しいほどの地域力が高く、この公園造成も石山地区町内会連合会(町連、福土昭夫会長)や軟石文化を語る会(岩本好正代表)の強い要望で実現。その喜びを発信する狙いで同公園が全面オープンした97年から9回、町連らで組織した運営委員会が芸術祭を開催。無料で薪能や音楽コンサートなどを披露



札幌国際芸術祭の一つとして石山緑地公園「午後の丘」で繰り広げられた「OPEN GATE~動き続ける展覧会」。緑と崖の岩肌、さらに公園の軟石オブジェを背景に、美術と音楽がコラボしながら、即興パフォーマンスが披露された

した。3年前からは8月に約3千本のろうそくで野外ステージを包み込みながらライブ音楽などが流れる「いしやまキャンドルナイト」が執り行われている。東日本大震災の復興支援を目的で、09年に誕生した「石山地区まちづくり協議会(まち協、会長・福土町連会長)」が主催している。

この札幌軟石に魅せられて全国発信を続けているアラフォー女性が、軟石雑貨店「軟石や」を営む小原恵さん。頑丈で軽く、加工しやすいうえに、熱にも強い特性を生かして、建材用端材を小さな家や動物、小鳥などのミニチュア、文字をかたどったものなどにカット。絵柄を付けて、販売している。店舗兼アトリエは石山北地区にあり、軟石造りの築64年の民家。ネットと口コミで着実に





9年間かけて97年に全面オープンした石山緑地公園の「ネガティブ・マウンド」。異国雰囲気、音響効果が抜群といわれ、屋外ステージとして、薪能や「9・11祈る」という太鼓の共演、地元住民手づくりの「キャンドルナイト」などが行われている



札幌軟石を素材に制作された「軟石雑貨」。店舗兼アトリエでは「軟石ラブ」の小原さんが心を込めてカットして、デコレートした小物が並べられ、外国人からも人気、という。制作体験も楽しめる

ファンが広がり、12月9、10両日には名古屋でのイベントに出展するなど活躍している。

同公園そばの石山商店街では、12月9日から住民手づくりのイベント「石山スノーファンタジー」が始まり、石山振興会館（旧定山溪鉄道「石切山駅」や「ぼすとかん」（旧石山郵便局）など軟石造りの建物はイルミネーションやキャンドルで彩られている。3月31日まで。

地元の大学生や高校生も、これらのイベントに積極的に参加しており、福士まち協会長は「今後若者をはじめ住民らのアイデアを募り、緑地公園の活用策を深化させたい」と意欲を示している。

冬季間、駐車場は閉鎖中。

へはぎもと かずゆき・元大学教授